

手ぬぐい

－古くからある日本のよさ－

- 1 学年 第4学年〔前期〕
 2 主題名 伝統と文化〔4－(6)〕
 3 ねらい

日本人と手ぬぐいとの関わりを知った「友哉」の気持ちを考えることを通して、我が国の文化や伝統のよさに気付き、国を愛する心情を育てる。

- 4 資料名 「手ぬぐい」
 5 展開

	学習活動と主な発問	児童の反応	指導上の留意点
導入	1 祭りで手ぬぐいをしている写真を見る。 ○ 祭りで身に付ける衣装には、どんなものがあるでしょう。	<ul style="list-style-type: none"> ・ はっぴ ・ ぞうり ・ たび ・ はちまき ・ 手ぬぐい 	○ 祭りの衣装には手ぬぐいが欠かせないことを知らせ、手ぬぐいに興味をもたせる。
展開	2 資料「手ぬぐい」を読んで話し合う。 ○ 「友哉」ははじめ手ぬぐいもらったことをどう思っていたのでしょうか。 ○ お父さんの手ぬぐいを使ったしぐさを見ているうちに、「友哉」はどんな気持ちになったのでしょうか。 ○ 図書館で、手ぬぐいのこといろいろ分かっていくうちに「友哉」はどんな気持ちになったでしょう。 ◎ 「友哉」に手ぬぐいがいつもより輝いて見えたのはなぜでしょう。 3 「日本に古くからある物さがし」をする。 ○ 日本に昔からある物には、どんな物がありますか。	<ul style="list-style-type: none"> ・ どうして手ぬぐいが記念品として配られたのかな。 ・ 手ぬぐいはどんな使い道があるんだろう。 ・ お父さん、落語やっていたんだ。 ・ 手ぬぐいっておもしろいな。 ・ 手ぬぐいのことを調べてみたい。 ・ 手ぬぐいは着物と関係があった。 ・ 手ぬぐいは昔から使われてきた。 ・ 手ぬぐいが配られたわけが分かった。 ・ 手ぬぐいが日本人の文化や生活と結び付いていることを知ったから。 ・ 手ぬぐいのよさや便利さが分かったから。 ・ 折り紙、色がきれいで、いつでもどこでも楽しめる。 ・ せんす。持ち運びができて、いつでもどこでも使える。 ・ 風鈴。色や音色が涼しい感じを与える。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「音戸の舟唄全国大会」についての理解を促すために補足説明を加える。 ○ 手ぬぐいに興味をもち始めた「友哉」の気持ちをおさえる。 ○ 手ぬぐいの歴史について理解を深めるために、「反物」などの用語の説明をする。 ○ 手ぬぐいの価値を認識させるために、手ぬぐいのよさを知った「友哉」に共感させる。 ○ 実物や写真を用意しておく。 ○ それぞれのよさを言わせることで、日本の文化や伝統のよさに気付かせるようにする。尋ねる際には、テーマをしぼるとよい。
終末	4 教師の説話を聞く。	<ul style="list-style-type: none"> ・ わたしも、日本に古くからある物を大切にしていきたいな。 	○ 教師自身が大切にしている文化や伝統の品を紹介する。

6 授業の概要

(1) 主題について

本主題は、中学年の内容項目〔4－(6)〕「我が国の伝統と文化に親しみ、国を愛する心をもつとともに、外国の人々や文化に関心をもつ」を基に設定している。日本人は、明治維新以後、積極的に西洋文化を取り入れ、生活様式を変化させてきた。その中で、日本古来の文化は衰退し、日本人でありながらそのよさに気付かないで生活することも多い。そこで、日本人の暮らしを支えてきた身近にあるものに目を向け、そのよさを考えることを通して、日本の文化や伝統の価値を認識し、それらを守り引き継いでいこうとする心情を育てていきたい。そのことが、日本人としての誇り、さらには外国の人々や文化に関心をもつことにつながる。

(2) 自作資料活用のポイント

ア 他教科等との関連と実施時期

本資料は、主人公である「友哉」が、今はあまり使われなくなった手ぬぐいの歴史やよさを知り、日本の文化や伝統の価値に気付いていく内容である。本資料で育てる日本文化や伝統に対する興味や関心、よさへの認識がさらに深められるよう、道徳の時間の前後に第4学年国語科「くらしの中の和と洋」の学習を位置付けたい。この学習が10月下旬に計画されていることから、2学期後半に実施したい。

イ 資料の理解を深めるために

「音戸の舟唄」は、音戸地区の子どもにとっては郷土の伝統・文化として、歌を継承したり大会に参加したりして親しみ深いものである。

「音戸の舟唄」は、故高山訓昌氏（音戸町出身）により、日本三大舟唄として全国に広められたものである。「音戸の舟唄全国大会」はその灯を絶やさぬよう、音戸の舟唄保存会が全国ののど自慢に呼びかけて、年に1度音戸公民館で開催される大会であり、平成23年度が第4回となった。



出場記念の手ぬぐい

(3) 指導過程の工夫

ア 導入の工夫

子どもは、祭りのはちまきとして手ぬぐいを使う経験をしている。その体験を導入で取り上げることにより、資料への興味・関心をもたせたい。時期的にも秋祭りとも重なるため、しっかりそれぞれの体験について話をさせて資料の内容に入らせたい。

イ 展開の工夫

中心発問は、例示したものの他に、「もう一度手ぬぐいを出して見た時、友哉はどう思っただろう。」と主人公の行動に注目させて考えさせるとよい。

ウ 振り返りの工夫

実際に「昔から日本にあるもの」を使っている場面が紹介できるとよい。児童に尋ねる際には、「日常生活」、「遊び」等、テーマをしばって聞くと発表がしやすい。

エ 終末の工夫

教師が手ぬぐいの使用法をいろいろ実演することでよさを実感させることもできる。

(4) 参考資料

「はじめてのふろしきと手ぬぐい」（主婦の友社）

執筆者より

日本人と手ぬぐいの関わりについて全く知らなかった主人公の姿は、そのまま今の子どもの姿と重なる。徐々にその価値に気付いていく主人公の心の変容を追いながら、共感的に扱いたい。

(昭和東小学校 田邊 美智子)